

# オランダで WASHIを漉く

ペーパー・ビエンナーレと  
手漉き紙シンポジウム



オランダ・ペーパー・ビエンナーレで展示された筆者の作品「Lotus」（ライスワイク博物館）。この展覧会は2004年6月5日から9月12日まで開かれ、地元オランダや欧州各地以外からも、ウクライナ、イスラエル、カナダ、韓国、日本から招待された31名のアーティストの作品が展示された

写真提供：筆者（以下も同じ）

**てす** 手漉き和紙というところ、職人が何年も修行を積んで習得した高度な技術による、薄くて強い世界に誇る高品質の紙、というイメージを持つ向きが多いかもしれない。しかし、友人で親日家のオランダ人アーティストは「和紙づくりは簡単でいいよね」と言う。洋紙と比べて和紙の繊維は長く絡みやすいので、漉いた紙が乾燥するまでの間に指先で修正したり、繊維を継ぎ足したりできる。洋紙だとそういった失敗作はただの出来損ないにしか

らないけど、和紙だとそれが「味」となって、かえってオリジナルなおもしろい紙ができたりするから和紙づくりは楽しいのだと言う。

日本人が誇りに思っている和紙の素晴らしさとはまったく違った発想で、彼が和紙を評価し、愛好していることに、何か大事なことに気付かされた思いがした。

## その

オランダに昨夏からの1年間、ジャ

パンファウンデーションの芸術家派遣フェローシップで滞在した。ふだん、わたしが制作しているペーパーアート（手漉き紙に限らず、紙の原料繊維、機械製の紙、印刷された紙、紙による既製品、古紙・廃紙などさまざまな「紙」を素材とした現代アート）のヨーロッパでの現況を調査するとともに、その背景にある伝統的な手漉き紙の歴史や技法を研究するために、オランダのこの分野の第一人者であるブック・ブラムレット氏の助力を得て、いくつかの重要なペーパーアートの展覧会やシンポジウム

に参加した。

また、オランダ各地のアーティストや紙漉き職人たちとの共同制作を行ったり、アムステルダムの日本文化センターで一般の人を対象に和紙漉きや和綴じ本のワークショップを開催したりと、オランダの人々の温かいホスピタリティに支えられて充実した1年を過ごすことができた。

ここでは、滞在の初期に参加した展覧会「オランダ・ペーパー・ビエンナーレ」とその関連企画のシンポジウム「ペーパー10デイズ」について触れたいと思っ

## 昨年

で第5回を数えたこのビエンナーレ

は、ペーパーアートの重要な国際展の一つで、前回までハーグ近郊のライスワイク博物館で開催されてきたが、今回からオランダ中部の町アペルドールンに新しく完成した美術館でも同時に開催されることとなった。

わたしは、両方の会場での展示を依頼され、和紙の原料の一つであるコウゾの樹皮そのもの

はっとり としひろ ●1995年、多摩美術大学大学院美術研究科修了。同年今立現代美術紙展にて大賞受賞。以後、手漉き和紙とその原料であるコウゾの繊維を素材とした彫刻やインスタレーションを、個展や欧州各地での紙のシンポジウム等にて発表。2004年まで静嘉堂文庫美術館に勤務。IAPMA (International Association of Hand Papermakers and Paper Artists) 会員



を用いたものと、自分で漉いたコウゾの和紙に金箔を施したものと、同じ原料でありながら、それぞれ違った素材の扱い方による二つのインスタレーション作品を日本から送り、現地設置作業を行なった。

日本からは池崎義男氏と都築房子氏も出品した。わたしたち日本人作家の作品が、あくまで紙という素材の独自性にこだわり、その特性を活かし、なおかつ和紙の背景にある風土や歴史といった精神性にまで踏み込んだ作品であるのに対して、概して欧州のアーティストたちの作品は、紙という素材の可変性を活かして、自由な発想でつくられたものが多かった。意表をついたアイデアの感性豊かな作品に感心させられる一方で、素材に手を加え過ぎて、なぜこれをわざわざ紙でと、首を傾げたくなるような作品も見受けられた。

## 8月

末には、このビエンナーレの関連企画として、アペルドールン郊外の村にある紙漉き工房「デ・ミ

デルステ・モレン」を中心に行なわれた紙のシンポジウムに参加した。わたしは工房から提供された洋紙の原料で試みた立体作品と和紙に関する参考資料を展示するとともに、公開制作で和紙漉きのデモンストレーションを行なった。

1622年創業の紙漉き工房は長らく閉鎖されたままであったが、近年になって地元のアーティストや有志の手によって復興され、今回のシンポジウムでの披露目となった。オランダにはこのような昔からの紙漉き工房は、ごくわずかしか残っておらず、その復興に携わった方々も、シンポジウムでの一般来場者も、年配の方が中心で若い人は少ない。

手漉き紙産業の衰退は世界的に言えることだが、日本では各自自治体や地域で手漉き和紙のような地元の伝統工芸を町おこしに活用し、少なからぬ若い人



←シンポジウム会場の紙漉き工房「デ・ミデルステ・モレン」。10日間の期間中、アペルドールンの美術館と市内各所でのワークショップや展覧会、紙漉き工房での公開制作などのイベントが催された

↓製紙機材が並ぶ工房の内部。ぼろ布を叩解して紙の原料をつくるのに水車を動力とした昔ながらの工房。製紙業の機械化、近代化とともに閉鎖されていた



たちが熱意を持って取り組んでいたりする。しかし、文化や習慣の異なる国からの移民が人口のかなりの割合を占めるオランダでは、今後の少子高齢化とともに、伝統文化の維持、継承はますます難しくなっていくのではないだろうか。

## 誰も

が日常的に手にする紙。アーティスト

にとっては、下絵から本格的な絵画、立体作品までさまざま

に用いられる、この極めて基本的な素材を通して、それぞれの造形に対する考え方やその背景にある文化の違いなどが作品から透けて見える。そういった意味でこのビエンナーレはとても興味深い展覧会であった。

1000年以上にわたる和紙の文化をもつ日本でも、同様の展覧会を企画すれば内外から高い関心を集めることだろう。そして、技術や品質の高さや、歴史の長さを誇るだけでなく、もっと国際的な視野で和紙の可能性について考えることも必要になってくるであろう。